
GENTS THE WORLD

伝書鳩リネロサーズデイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

GENTS THE WORLD

【Zコード】

Z8642Y

【作者名】

伝書鳩リネロサーブズディ

【あらすじ】

三年前、世界全体で発生した謎の地震により決して交わることのない別次元の世界、こちらの世界と全く同じ大陸の南極大陸をのぞく五大陸が、この世界の海にパズルのように組み合わさり突如現れた。

今だ混乱する世界の中で、悲愴^{ひそう}皆無^{かいむ}…名前通りの人の域をはるかに超えた不幸な高校生

は毎日悲しい日常を送っていた。

そんなある日、悲愴のクラスに別次元から来た?という転校生、力

ンタレラ・リネシエロ 右目には眼帯そして背中には太刀を背負つた不審者ならぬ殺し屋?と不幸にも友達になつてしまつ。

そしてその日の帰り道、一人で歩いていた悲愴に驚きの言葉を告げられる。

「悲愴皆無、今日からお前は魔界帝国一一代目の魔王だ!!」

その日をさかに悲愴の悲しすぎる日常は一変する…そう、まさか俺がこの世界の救世主になるなんてこの時の俺は想像もしていなかつた。

プロローグ せじまつ（前書き）

初投稿をさせてもらひ伝書鳩リネロサービスで
この小説はスパロボのようにいろいろなアニメが参戦していくんで
興味のある方はぜひ読んでください。

プロローグ はじまり

「俺は夢の国の住人さ。」

中学生時代友人に言つた半分本気のそのセリフで冷たい目で見られたその夜、俺は頭を抱えて後悔した思い出がある。

幼いころから両親に捨てられ、叔父と叔母に育ててもらつた俺、悲ひ 憶皆無は現在安いボロアパートで高校に通いながらバイトをする毎日で何とか生きながらえている。

これ以上叔父と叔母に迷惑をかけないようにと思って始めた一人暮らし… それがありきたりな一人暮らしを始める理由、だが、俺みた いに一人暮らしをしているという高校生は現在90万人を超えたと いうニュースを耳にしたことがある。

それはすべて3年前の世界全体で起きた地震… 今では次元連結震と 呼ばれているあの地震によるもの、2012年6月11日に起きた 次元連結震により太平洋に北極と南極を除いたこの世界にある大陸 と全く同じ形をした決して交わることのない別次元の大陸が膨大な エネルギーによりパズルのように組み合わさり突出現した… それが 次元連結震である。

その次の日に世界が動き突如出現した大陸に調査団を派遣しようとしたとき、その大陸から巨大な熱源反応が感知されその熱源がまつ すぐ調査団のいたアメリカの本部に高速で移動し何の抵抗もできなかつた本部は数秒もせずに全滅した。

付近の監視力メラには空を駆ける20メートルはあるだろうと思わ れる巨大な白い人型ロボットが一機映つていて、あの大陸の文明の 高さが明らかとなると同時にこの世界のものではない、別の世界か ら来たつまり… 別次元の世界なのではないかという推測がわずか地 震発生から一日後でてきた。

その後も、たつた一機のそのロボットにアメリカ以外の世界各国に 被害をもたらしたそのロボットは日本で放送されたロボットアニメ

初期のガンダムにとても似ていたことから人々はそのロボットを白い魔物・ガンダムと呼ばれるようになった。

このままではまずいと感じた世界政府は世界のすべての最先端の科学とたくさんの人間を使い、対ガンダム用ロボットアーマードドローバーAT直立一人乗り戦車のスコープドックを開発した。

この名前は開発最大責任者の日本人が好きな装甲騎兵、ボトムズからそのままとつたものだといわれその形式や武器のすべてまでがアニメのスコープドックと全く同じで区別がつかないといわれるほどだった。

2012年8月12日…ガンダムが現れてちょうど2ヶ月が経過したその日、中国に向かうと思われる途中の通過地点日本の東京都で5機のATが世界で初めて使用され、計算しつくした行動パターンそして5機の見事な連携攻撃によりガンダムの約四分の一の4メートルの大きさしかなかつたものの見事に勝利した。

誰もが歓喜の声を上げる中で惨劇は起こつた。

ボロボロになり穴だらけになつたガンダムから突如激しい光が発生し日本全体を覆つたあとガンダムは完全に活動を停止する。

最後の無駄な足掻きだと思われた行動だつたが、その光を浴びた18歳以上の大人たちが次々と苦しみだし死んでいき、その日の間に人口は激減さらにそのうちの18歳以上の大人はわずか3%残り97%がすべて18歳以下の子供となり、日本は絶望的な状況に陥つた。

そして様々な国からの支援で18歳以上の大人が除所に増え始めているものの、人口は今だ1000万人を超えず、18歳以下の子供は90% 18歳以上の大人は10%と今だ絶望的な状況なのである。

だが悪いことばかりではなく、あのガンダムを倒したあの日から今だ出現した大陸の動きはなくなつたが、今だ油断を一切許されない状況だがそれによりATの量産+開発が進み今ではどの国でも100機を超すATを所持していていつガンダムが現れても問題はない

といわれている。

こうして今は再び人類は平和を取り戻した…だが、突如現れた大陸の詳細は分かつてない。

宇宙人が攻めてきた、神が天罰を下したなど、いろいろと説はあるが一番有効とされる説は突如発生した膨大なエネルギーにより、別次元の世界と一時的に連結し別次元の大陸がこの世界に吸い寄せられた…という考え方が代表的になり次元連結震という名前がついた。でもそれはあくまでも考えであり、本当のことは誰ももわかつておらず調査したくても、未知数の力を持つあの大陸に近づこうとするやつは誰一人としていないだろう。

誰も知らない真実…今思うと俺は…いや人類みんな文字通り夢の国の住民だったのかもしれない…そう思うとなぜか嬉しくてたまらない、それならこんな悲しい俺でもかつこいいヒーローになれるかも知れないからだ…

そして、悪夢は再び人類に降りかかる。そして俺の人生は全く別の未来に進みはじめてゆく…これは、名前通りの悲しすぎる高校生悲愴皆無の物語である。

プロローグ はじまり（後書き）

説明長くてすいません。
よかつたら感想をお願いします。

第一話 悲しい奴ばかりって言葉…ないですか？（前書き）

ついに記念すべき一話となりました。

読んでる人はたぶんいないと思うが…とりあえず書くんで物好きな人は読んでください。

第一話 悲しい奴でいいよ〜って言葉…ないですか？

そこは、東京にある唯一の高校、白虹高校びやうじゆこうこうと呼ばれる高校… その高校でいつも朝のホームルームが始まろうとしていたのだが、今日の朝はいつもと違っていた。

教師：「えつ〜と、あいさつはいいのまま聞いてくれ、今日のニュースみんな見たよな？」

男子生徒A：「アカギが鶯巣編が終わっても続くつてやつですか？」

教師：「うん、ちがうよ。」

男子生徒B：「じゃあ、あれですか？ オリジンがアニメ化するつてやつ。」

教師：「それも違つんですけど…」

男子生徒C：「分かつた！…駒野がPK外したことで総理は怒つてるんでしょ。」

教師：「そのニュースものす」古いよね…せめて大津のダイビングヘッドを言つてあげたらいいんじゃ…ってちがう… あれだよ… あれ…今朝全部のチャンネルで言つてたあの…」

男子生徒A・B・C：「「天気予報か…」」

教師：「ハモつて言つた…お前ら絶対わざとだろ… だいたいお

前たちはいつもいつも…」

男子生徒A：「総理、ドラえもんみたいな怒り方はいいので早く話を戻してください。」

教師：「……昨日の夜、前よりもかなり規模が小さい次元連結震が東京で発生したってニュースだったんだが…男子生徒A…お前放課後、職員室な。」

おつと、うつかりこの教師の説明をしていなかつた…この教師の名前は小泉連太郎（こい

ずいれんたろう）ついたあだ名は総理でこの学校で三人しかいない教師の一人で、のりが

よく生徒にはそれなりの人気がある一年の担任である。

男子生徒A：「えええええ…！…ちよつまつ…それだけは勘弁してくださいよ総理…！」

小泉：「総理じゃなくて小泉先生だ。」

男子生徒C：「小泉総理、で、その次元なんたら震がどうかしたんですか？」

小泉：「おつと、そうだった話が違う方向に行く前に説明しないといかんな…男子生徒C、職員室行き確定な。」

総理が生徒に向き直り、ゆっくり話し始めた。

小泉：「三年前からあの大陸に動きはないが、やつらは必ずまた、なにかを仕掛けてくるはず… それは昨日起こうた次元連結震もその始まりの合図じゃないとも言い切れないのも確かなのが今の現状だ。」

「

ざわざわと、クラスがざわめき近くの人とひそひそ話をはじめる。

小泉：「はいはい、黙つてくださいね肩ども…」

一瞬で一切の話声がきこえなくなった。

小泉：「だが、この世界もなにもせずにそれを待つているわけではない、今では対ガンダム兵器の^{アーマードトルーパー}ATがどの国でも百体以上それを保持しストップドッグを始めとするドッグ系、トータス系、マーティアル制ATなどの開発もされ対策は万全といつのも今の現状なんだか、それは日本を除いた国だけ… なのも事実だ。」

クラスのみんながそれまでとは違う深刻そうな顔を浮かべ下を向いていた。

理由は明白、ガンダムから発生した謎の光によりここにいる大半の生徒の親はみんな死ん

でしまい子供ばかりになってしまったこの日本にはAT乗りがほとんどおらず130体AT

を保持している日本だが、そのうちの五体だけしか使われていない

… その五体も三年前東

京でガンダムを撃破した五体でそのうちの4人のAT乗りが光によ

つて死亡、実際、日

本にいるAT乗りはたつた一人しかいないのだ。

小泉：「そこで、日本政府は対策として47の都道府県一つ一つに必ず一校はある高校の中

から抽選で選びその選ばれた高校の授業はすべてAT関連の授業となり、高校の全生徒を

AT乗りに育て上げるという制度がだされ、抽選によりひとつの高校の名前が読み上げられ

た…」

男子生徒D：「… それってまさか…」

今までの話を聞き話の趣旨を理解した何人かが総理を見つめ立ち上がる。

小泉：「察しが早くて助かる… そう、選ばれたのはこの東京にある唯一の高校：白虹高校だ…」

男子生徒A：「…ふ…ふ…ふざけるなよ…」

先ほどまでふざけていた男子生徒が声を荒げて立ち上がりその勢いで椅子が倒れた。

男子生徒A：「なんで俺たちがガンダムを倒すためにAT乗りにな

らなくちゃならないんだ！…」

女子生徒E：「そつよ…自分たちの未来は自分で決める…なんで国に指図されなきゃいけないの…！」

男子生徒B：「もしかしたら死ぬかもしない…俺はそんなことは死んでも」めんだね！…」

女子生徒B：「総理…なにか言つてくださいよ…」

男子生徒E：「やつだやつだ…ちゃんと説明しろよ総理…！」

みんなの罵声が飛び交う…総理はただうつむく」としかできなかつた…が…

??:??:「俺はやるだ…」

その一言で教室は一瞬で沈黙しその声のあつた方向を全員が見ていた。

??:??:「俺も運がいい、親が殺されても何もできなかつた俺にあの大陸に復讐するチャンスがきたんだ…俺はやる…誰がなにを言おうと俺はあの大陸にいる奴らを片つ端から殺してやるよ。」

その声はほんとこうれしそうで…そしてとても重い一言だつた。

男子生徒A：「氷道…お前なに言つて…」

男子生徒F：「俺もやる…俺たちをもて遊んだあいつらに復讐するんだ…」

その話を聞いた生徒の一人が立ち上がる。

男子生徒G：「なら俺もやる。」

女子生徒F：「私もやるわ。」

一人また一人と次々と立ち上がり氷道という男子生徒に集まって行き、反対派の生徒と賛

成派の生徒が五分五分に分かれた。

男子生徒A：「お前ら分かつてるとか！ AT乗りに命の保証なんでものはない…最悪死ぬかもしれないんだぞ…！」

対立する意見この状況があとどれくらい続くのか見えない未来はある人物によつて終止符を打たれる。

？？？：「僕たちが何とかしなければ確実に世界は崩壊するのです…ふつふ…困つたものです。」

二年のクラスメイト全員：「ん？」

？？？：「その少女は、この世界を自分にとつて面白くないものだと思い込んでいる…これはちよつとした恐怖ですよ。タンタンタンタンタンタンタンタン…タンタンタン…ドドドカッ…どじか…」

そこには机にうつ伏せになつて寝ている男子生徒とその足元に落ちてこいるまつがーれス、

ルが流れる iPodがあつた。

小泉：「…またお前か…悲愴皆無…」

悲愴：「ギャアアアアアアアアアアアア…」

悲愴：「ウツギー…あ…遺体…驚かせな…」

悲愴：「ウツギー…あ…遺体…驚かせな…」

小泉：「学校に不要物を持つてくるなと何度も言つてゐるだら…」
ついでに遺体じゃなくて痛いだ…活字でしか分からな…」

るな…！」

悲愴：「えつ、あつ…」「めんなさ…」

漢字の間違いに気付いた俺は素直に謝る。

悲愴：「で…なんの話をしてゐんですか…？」

みんな：「…」

悲愴：「あれ？なんかやつちまたパターンのよつな…」

永道：「いつけ～みんな…」を完膚なきまでにボコボコに

みんな：「了解…」

クラスの全員とそして総理までもがびびかりタマ殴つこされる悲
愴皆無…」こうして物語

は始まつた。

こんな言葉を聞いたことがあるだろうか、悲しい奴ほど稼ぎが少ない…無論そんな言葉などない…俺が

即席で作つた言葉である。

そう、それはそんな物語、何のとりえもない浅学非才：人並み外れた不幸な人間、主人公に全く向いて

いなし悲愴皆無により生み出される全く新しい物語が…

第一話 悲しい奴隸じょくひへつて言葉……ないですか？（後書き）

書くのに多少時間はかかってしまいましたがなんとか書き終えることができました

た。

感想よろしく…！

第一話 転校生はクールでかっこいい？（前書き）

ついに一話目となりアクセス数も前よりは少しづくなつた今日この頃…
はあ…伝書鳩リネロサーブズデイはこの頃絵が描けずため息をつくのであつた。

わけのわからない前

書き 完

第一話 転校生はクールでかつっこいい？

突然で申し訳ないが…君は不幸な人間と聞いたら誰を思い出すだろうか？いろいろと思い浮かぶだろうが、一番代表的な人物といえばとある魔術でている上条当麻あたりだと思われるが…ここの一帯に住む人間はみんなこの俺、悲愴皆無だと即答するぐらいいの悲しい人生が広まっている。

それは物心つかないころ両親に捨てられたときからはじまつたその人生…それはあまりにも悲しいものだった。

代表的なのが、入学式集団感染事件である。

最初の不幸で、重い病気にかかり幼稚園に通えなかつた俺は小学生になることはとても楽しみで、毎日わくわくしすぎて眠れないという状況が続いた。

そして待ちに待つた入学式当日、不幸にも高熱が出てしまい入学式を休むと聞いた俺はおじいちゃんたちの反対を押し切つて一人で入学式に参加した。

その後、急いで病院に連れて行かれ検査したところ、これまで見したこともない症例の超感染型新型のインフルエンザに罹つていてが発覚…そして翌日、入学式に参加したすべての人がそのインフルエンザに感染、全員が病院送りにされ一ヶ月以上入院し最高で一年以上も入院したやつもいたらしい…当然学校はしばらく閉鎖となり、学校に行けず悲しかつた反面罪悪感を深く感じながら過ごした…これが入学式集団感染事件の全貌である。

そしてそれを境に俺の不幸は一気に加速した。

小学校は毎日歩いて登校するのだが、その時に必ず車か自転車にぶつけられ毎日のように救急車に運ばれるという日々が続き中学になるまで学校に行けた例がない。

俺にとって通うのは学校ではなく病院というシステムがいつの間にか出来上がつてしまつたのだ。

そして中学に上がり始めて学校に通う喜びに浸っていたのだが、入学校式は前のこともあるので参加できず、クラスからは入院生活の恨みにより人間サンドバックとなつた俺は毎日半殺しにされながらもなんとか生きながらえていた。

さらに！！

氷道：「ながい！！」

その瞬間俺の横腹に氷道の両足が食い込みそのまま吹っ飛ぶ。

悲愴：「ぬがあああああ！！…いつた…なにすんだよ連麻！！」
なにもしてない俺にいきなりドロップキックをするやつを当然無視することなどできない。

氷道：「お前の紹介分が長すぎるから、ものすこく少ない読者のために強制終了させただけだ！！」

悲愴：「えつ？ 読者？ なにそれ？ もしかして食べれるの？」
なにを言つてるんだこいつは？

氷道：「はあ～、お前のバカさ加減は見てあきれるぜ…」
こいつは氷道連麻ひょうぱんれんま俺のたつた一人の親友である。

悲愴：「なんだって、お前も成績はあまり良くないじゃないか！！」

氷道：「てめえ！！俺の紹介分がたつた一行だと！！なんかもうちよつと説明することがあるんじゃないのか！！このクソ野郎！！」
さつきから意味分からないうことを言つて怒る氷道が次第にムカついてくる。

悲愴：「さつきから意味分からなうこと言つた…」の、暴力団組長の息子が！！

氷道：「つ…貴様…！…よりによつて言つてはいけないことをいつたな！！悪いがここで死んでもらおう…！」

悲愴：「なにを言つてるか分からんが…そつちがやる氣なら返り討ちにしてやるぜ！！」

ドゴッ！！ 僕の顔に右ストレートが直撃する音。
ガツ！！ガツ！！ 僕が地面に一回バウンドする音。
ドーン！！ 壁に激突する音。

悲愴：「グッハ…つ…強い子に…会えて…」

朦朧とする意識の中で俺はゆっくり目を閉じ…

バシャーン…！ バケツの水を氷道にぶちまけられる。

悲愴：「……」

氷道：「おつと、そろそろ一時間目が始まつちまつ、確か場所は体育館だつたよな…げつ…やつば…んじや お俺はおいとまさせて もらうぜ…！」

走つてその場を去る友を俺は心の底から恨んでいた。

悲愴：「俺も行くか。確か場所は体育館とか言つていたよな…」

水をかけられたことで意識が完全に回復した俺はゆっくりと立ち上がり…

？？？：「ちよつといいか？」

突然聞き覚えのない声が聞こえた。びくびく俺を呼んでくるようだ。

悲愴：「はい、なんで…『せや ああああああああああああああああああああああああ…』

振り向いた瞬間絶叫、急いで逃げよひと即ちターンし逃げよひするが…

？？？：「おい、ちよつと待て…！」

だが、襟をつかまれ俺は声をかけられた人につかまつてしまふ。

悲愴：「すいません…！すいません…！すいません…！…どうか命だけはお助けを…頼む……」の私、悲愴皆無を男にしてやつてください…！」

観念した俺は必至に土下座＆命乞いをする。

？？？：「いや…そんなに怖がらないでくれ…」

そうは言つものの怖がるなと言つほうが無理である。なぜかつて？ だつてかつこよくて右目には眼帯で背中に人間の背丈以上はある剣？ 刀？ ああ…！ もうどうでもいい…！ とりあえずものすごく怖い、めっちゃクールなやつみたいな話し方はするので完全なクールキヤラだし今にも殺すぞというオーラが背中からてる感じがする。

悲愴

「すいません……」と謝ったとしたところであよつと考える、相手は怖がるなど言つていね……もしまだ「すいません……」とか言つて怖がるような素振り（そぶり）を見せたら…

俺の脳内未来予想図

「……………やっさきから怖かるなど言つてゐたろ！！死ねえええ！」

背中に背負つた刀？剣？を抜き取り構え、俺にを確実に捉えてそれを振り下ろす。

ああああああああ！！！」

ザシユーー！
俺が真つ二つに切られる音。

俺の脳内未来予想図 完

うわああ！！駄目だ！！確實は絶される！！」「たーだらーなんどしても怖がつてない素振り（そぶり）を見せるしかない…

悲愴：「ああ…大丈夫ちよつと驚いただけだから…」

悲愴：「えつ？」

？？？：「膝がめっちゃ震てるが、大丈夫なのか…？」

悲愴「…おやが、そんなこと…ない…」

終わつた。悲しかつた俺の人生を振り返りながら、たんだん恐れていた死が受け入れられる。

悲愴：「ああ、俺を殺すのか。さあ早く、殺してくれ。できればなんの痛みも感じない殺し方にしてほしいな。」

？？？？「いや、殺さないから…ちょっと聞いて

いや 続かないから…せーと聞いてくれ お前みたいに俺はたくさんの人道を尋ねただが、お前と同じように叫んで逃

げて行つた…教えてくれ…俺はなんでそんなに怖がられるんだ？」

悲愴：「……」

自覚しないこいつはバカなのか?

悲愴・「強いて書ひなれり…その背中に背負つてこゆやつがぬひりや

懐かしい

ヤーへ噬んた！！

？？？……ああ！！！そうか！！！そういえばここの人間は武装していなかつたか！！すつかり忘れていた……」

卷之三

なにかどつても隠を逃してはいけないことを隠してしまったよ。……

？？？：「……恩にきる。俺の名前はカンタレラ・リネシエロ。別次元からきて二つ子の三分の二のうちはうらこ思うが二らん。

悲愴：「ああ、ソチウルナシナシベ。」

ん？今」いつ別次元から来たとか言わなかつた？

たんだつた

驚きのあまり声が出ず。遅れて二十秒、遅れて絶叫する。

リネシトロ・「すまん…今のは聞かなかつた」とにしてくれ。

両手を合わせ深く頭を下げる。

悲愴：「……はあ……別にかまわないけど……」

ここまで頼まれるといやだというわけにはいかないので俺はそう返事してしまった。

リネシエロ：「やつしてくれると助かる……そつだ！……俺と友達にならないか？そしたらお返しとかできるかもしれないしな……」

悲愴：「ああ、それくらいならお安い御用だよ」。

リネシエロが手を差し出し俺はその手をとり深い握手を交わす。

……心中では叫んでいた、「やうかしたああああああああああああああああああああああああ」……

悲愴：「で、道案内とか言つてたけど……ビルに行きたいんだ？」

そんなことは表に出さず話題を変える。

リネシエロ：「おつとそつだつた、一年の教室つてどこにあるの？……一年の教室つて俺たちの教室じゃないか。……何の用があるんだ……いやな予感がするのでとりあえず聞いてみることにする。

悲愴：「一年の教室か……そこでなにかすんの？」

あくまでも平常心である。

リネシエロ：「ああ、俺は転入生で今日からこの学校に通う」と言つてている。

パタリ　俺がそのまま地面に崩れ落ちる音。

リネシエロ：「おこ、どうした悲愴！……しつかりしろ……！」

意識を失う直前俺は思った、そういうば突然出てくる転校生は、クールでかつこよくとても不思議な人でその正体は超能力者かなんとかだということを……以前そんなことにあこがれていた俺を……心の底から呪つていた。

第一話 転校生はクールでかっこいい? (後書き)

こんな感じで前より長くなってしまったががんばって読んでみてくださいな。

あつ！…そうそう新しく書いたクソ小説ギャグガンダムってやつがあるんで、興味のある方は読んでみてくださいな。

第三話 熱血キャラは女供向け（前書き）

ちつと遅くなりすぎましたがなんとかあがりました。
…まあ読んでるやつなんていないか…つれしいと悲しいの感情が混
わつ合つてとっても複雑です。

第三話 热血キヤラは子供向け

あの転校生カントンタレラ・リネシエロの紹介から始まつた授業、紹介のときには刀的なものは背負つていなかつたので誰も恐怖心は抱いてはいなかつたかたものこの俺悲愴皆無だけは頭を抱えて震えていたことをこのクラスで知る者はいなうだろ。

うどしていた

一時間目に行われた全校集会で最初反対してた生徒たちにより学校で一年だけがその育成授業を受けることになつたらしが残念ながらじんけんで一年が負けてしまつたらしいらしいとしか言えないのは無論氣絶していたからである。

小泉：「え、こと【紹介】が終わってたんで早速授業に入りたいんだが…残念ながら俺にATを教えられるほどの知識は持っていない…」
アーマードトルバ
なので国からAT乗り育成授業を担当する講師が来ることになった。

卷之三

「……」

「AT乗り！！」

「……る者はほとんどいないというあの人には会えるの……」

女子生徒C：「私も私も！！」

男子生徒B：「俺はそのついでに握手してもらひや。」

あんなに命がどうたらこいつたらとかで戦いたくないとかで争つていた人たちの変わりようがすごいような気がする。確かにAT乗りの給料がひと月300万円って聞いたら飛びあがつて喜んでたらしからな……みんな生活に苦労してるんだな、うん。

小泉：「まあまあ、そつ焼てるんじゃない……じゃあ講師入つてください。」

ワクワク ワクワク

生徒の大半が机から身を乗り出していつでも突撃できる体制となる。ガラガラガラ！！

ドアが開いて……そして……

？？？：「やあみんな、待たせたな！！」

30代くらいのメガネをかけた天然パーーマの男がドヤ顔で立つていた。

クラスのみんな：「…………ん？」

小泉：「ええ……改めて紹介しよう……西織高氏にしおとたかうじ」の人はガンダムを倒したあのAT隊の幻の6人目と呼ばれている。役立たず……じやなかつた伝説のAT乗りだ……」

西織：「今役立たずって言おうとしたよね？違うよ……ちゃんと出撃までしたんだよ……その後がれきで機体が躓いて壊れちゃって……それで修理してたら……なんか残りの5機がガンダムを倒しちゃって……え～その……なんだ……まあ、とりあえず俺は役立たずっこじやない……！」

クラスのみんな：「…………」

全員が机にきちんと座りなおして真つすぐ西木を見る。

小泉：「まあ、そういうことだ……講師なにか一言お願ひします。」

西織：「うつしゃ……この学年全員を1人前のAT乗りにするためにやつてきた西木崇だ！！

これから様々な厳しい訓練が君たちを待つていてるが！！君たちならきっと乗り越えられる！！もし泣きたいときがあつたらその時は俺

の胸で泣け！－以上－！」

小泉：「…つわあ、キモ…じゃなかつたものすゞく暑い－言ありが
とづゞじやこます講師。」

西織：「暑い？熱いじゃ ないの？しかもキモつて…」

小泉：「じゃあ西木講師に質問がある人、手を挙げて－！」

西織：「無視すんな－！」

氷道：「はい…」

総理と意味不明の西木講師のコントが行われている中で俺の親友こ
と氷道連麻が手を挙げる。

小泉：「んじゃ氷道。」

氷道はゆっくり立ち上がる。

西織：「おお遠慮せずになんでも聞いてくれいいぜ。」

氷道：「こんな講師の言つことを見きたくないんですけど、どうす
ればいいですか？」

西織：「このガキが！－言つていいこと悪いことがあるのを知つ
て…」

小泉：「そつだぞ氷道！－今は質問タイムで相談タイムじゃない！
！そつこつとは次に行われる罵声タイムの時なら言つてもいいぞ
！－」

西織：「フォローになつてないよ！－なんだよ罵声タイムつて！い
つ行われ…」

男子生徒A・B・C：「はい…」

先生たちを3人の息ぴったりのボケでからかうことから黒い3連星
と呼ばれ教師に恐れられている男子生徒A・B・Cがほぼ同時に手
をあげる。

小泉：「おお黒い3連星！－こいつに一発なんか言つてやれ－！」

西織：「教育者の言つセリフじゃない－！」

ん、よく見ればあんなにいじられてるのになぜあの講師は笑顔なん
だ…少し考えたがすぐ考えるのをやめた。

男子生徒A：「西織ではなくモジヤメガネ+ドM変態野郎講師…と

呼んでいいですか？

西織：「そんなおスパイでてくるメガネと同じにしないでほしい

西木謡館と叫んで

「男子生徒曰く：『しゃあ僕はクソガネ+超トノ変態さんで呼ひます。』」

卷之三

男子生徒C：「もうめんどいんでエスコで呼ひます。」

泣きながら入ってきた扉を突き破り教室から全力で逃げようとする

が總理（小泉先生）が慌てて思つて、モジヤメガネを取り押さえる。

まだ授業に毛入つていないのでどこに行くんですか?

西織：いやだ！！もうこんなケラスにAT乗りの授業なんてでき

だだをこね必死になつて小泉を振り払おうとするモジヤメガネは…
これ以上は想像にお任せします。

小泉：「なにを言つてるんですか？みんな超エリートのAT乗りのモジヤ・クソメガネ+超ドM変態野郎そしてクズさん講師をかつこいいと思つてるのに素直にそれが言えなくてついつい悪口を言つてしまふだけなんですよ！！」

萬葉集二卷之二十一

西織：「… そうなのかな？」

小泉：「 そうですよ。本當はみんな超エリートのモジヤ・クズメガネ+超ドM変態野郎そしてクズさん講師のことが好きなんですよ。」

急に元気になつた講師は教台に立つ。

とりあえずこの講師は単純です。『ごくバカだ』ということが判明し俺は何となく教室を見渡してみる。

悲愴：「ん？」

俺の生まれつきの不幸により最悪の隣の席になってしまった転校生のカンタレラ・リネシエロがとても真剣な表情での講師を見ていた。

その目は呆れてものも言えないほかの生徒とは違つ…まるで警戒しているかのような目をあの講師に向けているような。そこで俺は考えるのをやめる、無駄になにかを考えるのは自分の悪い癖だということは身をもつて知つてるので視線をあの講師に戻す。

西織：「やつぱりもうやだあああ……」

小泉：「落ち着いてくださいモジヤ・クズメガネ+超ドM変態野郎そしてクズさん講師……」

西織：「もうその呼び方はやめてくれ……」

この講師とはとても仲良くなれそうな感じが…ん？

誰かの視線を感じた俺は再び周りを見渡すがみんなあの講師を見て大笑いしている…

気のせいのようなので今度は窓から外の景色を眺めると澄みきつた青空の下を車や人が行きかい運動場で陸上かなにかをやつているのか50メートル走をしている生徒がいる学校ならではのいつもの景色が広がっていた。

第三話 热血キャラバン供向け（後書き）

やつべまた次の話考えなくては……なんか……

第四話 運命は必然…とか言つたりじよ? (前書き)

西織：俺の名前は結局西木なのかそれとも西織のじつちなんだ？

男子生徒A：いいえ、先生はクズです。

西織：殴つてもいい？

第四話 運命は必然…とか言つりじこよ?

そしてあの西織ならぬクズ講師は結局教室を飛び出してしまったために世界の注目するAT乗りの授業は次の日に持ちこされ人生初の一時間授業を体験した一年生一同はどこかに遊びに行つてゐる中この俺悲愴皆無はといふと…

悲愴：「はあ…いい湯だつた…」

学生寮の中浴場を勝手に使い自分の家のボロアパートの帰り道を歩いていた。

悲愴：「うちのアパートには風呂がないからいつも帰りにここを勝手に使うんだが…」

帰りが早すぎて何もやることがなく、金も余裕はないのでまつすぐ家に帰るつてのも結構悲しいもので…

ドカ！－

いつもお約束なのか車にひかれ俺は宙に舞いながら地面に落ちる。

悲愴：「うぐ…」

いつもだがめちゃくちゃ痛い…体のどいうどいう痛いことこのはあるがいつものように腕の骨を一本持つていかれたいつもの感覚がする。

悲愴：「そしていつものように車はどこかに逃げると…」

まったくもつて運が悪すぎるがこんなことに慣れすぎた俺にとつてこんなことどうどいうことはない…ほらもう痛みが引いてきた。車にひかれて倒れていた人間がバツと起き上がり帰り道を歩く。

？？？：「おいそこのお前！－！」

悲愴：「ふへ？」

本日の二度目となる聞き覚えのない声に呼びとめられた俺はうじろを振り返ると、そこには…

悲愴：「秋葉原はここじゃないですよ？」

？？？：「初対面の人にたいしてそれはないぞ…」

猫耳+尻尾のフル装備に髪の色が赤色のコスプレさん、俺と同じ年

くらこの少女を見ればそんなことを口走つてもおかしくはないと思つ。

？？？？「そんなことはどうでもいい……お前今車にひかれたようだが大丈夫なのか？」

悲愴：「くつ……ん？……えつ……？」

？？？？「いや……当たり前のことを聞いたはずなんだがなんでそんなに困惑すんの？」

急に申し訳ないが実は俺がいつも車にひかれてるということを知る人物は親友の氷道と小学生のころの俺を知る人しかいない。考えてみれば意外と簡単、車にひかれたなら普通は周りの人人がすぐに駆けつけ救急車と警察を呼ぶ光景が浮かぶだろう。そう、高校に入つてから俺が引かれるときはきっと周囲にひどがいない……なのでだれもそんな心配をして声をかけることをするようなやつはないのである。

？？？？「あの……お~い聞いてる。よくわかんないけど泣き田になるのはやめて……」

悲愴：「えつ……ああ」めんよ。大丈夫腕の骨が折れてるけどこんなの寝たら治るし……こんなことは日常茶飯事だしね。」

しまつた、うれしそぎて泣いてしまうところだつた。

？？？？「ん？日常茶飯事？……つてことは毎日あんな風に車にひかれてるのか？」

悲愴：「まあ、他にも信号はまつて赤だつたり、天氣予報は悪いほつに外れちゃうし、

三日に一度は財布を落としたりあとは……」

？？？？「いや、もうこれ以上言わなくて結構だ……その代わりに名前を教えてくれないか？」

悲愴：「えつ！？いや……別に名乗るほどの者では……」

？？？？「いいから言え……」

悲愴：「悲愴皆無です……」

殺氣をだしてまで聞くことじやなことと思つ……

？？？：「うん…」

猫耳少女は何かを考え始め時々唸り声をあげる。

それを眺める俺はふと思つ… 猫耳 + 尻尾のフル装備つてこんなかわいいもんだつたか？… いや違うあの少女にあのフル装備がものすごく似合つているからああ見えるのか… 今度氷道に猫少女計の画像売つてもらつか…

？？？：「よし…きめたぞ…！」

なにかを決心したらしい少女がこちらに歩み寄る。

悲愴：「あの、なんでしょう…」

「なんでしょうか？」と尋ねようと思つたその時…

？？？：「魔界帝国一代目魔王のアビス・F・ルシフェルが宣言する。悲愴皆無…今日からお前が魔界帝国二代目魔王だ…！」

悲愴：「…」

アビス：「…」

「…が続く行が今日だけで一回でてくるとは思わなかつた。

悲愴：「いい精神科の医者を知つてゐるんで今すぐ紹介してあげますから…」

アビス：「いや…精神のほうは正常だが…」

悲愴：「大丈夫ですよ。値段はお手頃だし先生は優しいですから」

アビス：「人の話を聞けや…！」

悲愴：「ぎやふん…！」

脱力系の叫びをあげてしまつ。

アビス：「私を一次元と三次元の区別もつかない廃人と同じにする

な私は本当に魔界帝国一代目の魔王で魔界を支配していたんだぞ！

！」

悲愴：「そんなことを急に言われても信じられるわけがないじゃないか！？」

もつともな話である。

アビス：「ああ、もういい……もう決まつたから早速」

となにか言いかけたところで…

ズドーン！！パラパラパラ…

空から人が降つてきた衝撃で着地点のコンクリートの道路がへこんで穴があいた。

？？？：「あ痛たた……ちょっと勢いつけすぎたかな…」

そう言い足をさするまたもや俺より年下と思われる少女がいた。

悲愴：「ここってホントに三次元なのか？」

自分の世界がよくわからなくなつてしまつ。

アビス：「さあ？ 私に聞かれてもな…？」

隣のアビスと名乗った自称魔王までもが曖昧な返事をする。

アビス：「今失礼なこと考えなかつた？」

悲愴：「とと…とんでもない…！」

なぜ分かつた…！

？？？：「ん？…あつ…！」

その少女が俺を見て突然声を上げる…俺の顔になにかついているのか？いやそれとも見ていられないほど自分が不細工なのか？…でも、顔だけは並より上くらうって言われるし…

？？？：「悲愴皆無…」

悲愴：「へつ？」

な…なぜ俺の名…あ、俺の名前はこの辺じや有名だったのをすつかり忘れていた。

？？？：「悲愴皆無さん…ですか？」

ちくしょー！！有名なのは名前だけかよ…だが、返事をしないわけにはいかない…

悲愴：「園十里弟素（その通りです）」

アビス：「活字でしか分からんギャグをするな…」

魔王にツッコミをされてしまった。

？？？…「やつぱり…写真と全く同じ顔をしているし…これで間違いはなさそう…」

なにか言つたらしいが全く聞き取れなかつた。

悲愴：「あの…なん…」

？？？：「兄さん…！」

そしていきなり俺の胸に飛びついてきた

？？？…「…」

その少女はどうやらうれしそうだが…全く状況が飲み込めない…て
いつか今日はちよつとそんなことが多くないか？別次元からきたと
いうカンタレラ・リネシエロ…魔王らしいアビス・F・ルシフェル
といふ「スプレ少女に」代田の魔王に任命されたらしいし…そして
最後には俺を兄さんと呼ぶ…ん？つてことは俺に妹がいた…？ああ
…考えるだけで頭が痛くなる…が…！」

悲愴：「今の状況は最高だな…」

心の底からそう思つてしま…

ジャキン…！

鉄でできたなにかがなにかにこすれあつ音…そつ、まるで刀をさや
から抜き取る感じの音で…

？？？…「…！伏せて…！」

シューン…といふ風を裂く音がし俺の頭があつた地点に刀が横に薙ぎ
払うような形で振られていて少女に引っ張られなければ俺は確実に
死んでいたという状況にいつの間にかたたされていた。

？？？…「ちつ…！」

フードで顔を覆つているために顔はよく分からぬがおそらく男だ
と思われるそいつは再び刀を構え俺に振り下ろそうとする。

悲愴：「いやあああああ…！死ぬ死ぬ死む…！殺される…！」

なんとか男から見てひだりの方向に転がりなんとかそれをかわすが

完全に体制が崩れその場にうつ伏せになってしまった。

？？？：「これで！！」

その隙を逃すはずもなく、その男は刀を再び俺に振り下ろす。

悲愴：「ちくしょお！！俺の不幸はここまで悪化するなんてえええ
！！」

死を覚悟した俺は強く目を閉じる、これから必ずくる激痛に備えるために…が、

ガキン

振り下ろされる刀をなにかが受け止めたいい音がして俺は反射的に目をあける。

するとそこには周りがオレンジの光を放つサーベルを持った少女が男の刀を受け止めている姿があった。

？？？：「よく分かりませんが兄を殺そうとするのならこの私、地球防衛企業遊撃課一番隊の悲愴奏ひそうかながとめてみせます。」

周りがオレンジ色の光を放つサーベルを受け止めている刀が徐々に赤くなり溶けて刀が曲がりそれを少女が切り裂き武器を無効化する。それを察知していた男は刀を即座に捨てて後ろに下がり間合いを取る。

？？？：「くつ…邪魔がはいるのは厄介だな…」

そう言うと男は地面に何かを投げ付ける、するとそこからたちまち煙が起こり周りが見えなくなる。

奏：「逃がすもんですか！！」

逃がすまいと追撃をはからうとする。

アビス：「待て！！」

それを見たアビスが奏の手をとる。

奏：「離してください、でないとあなたを…」

アビス：「無闇に突つ込むのはリスクが高すぎる、深追いはしない
ほうがいい。」

奏：「うつ…」

アビスの言つてることが正しいと判断した奏はそれ以上男を追うこ

とはない、白い煙でふさがっていた視回がもどるがやはり男の姿は見当たらなかつた。

アビス：「あの男…けつこうやる奴かもしれんな…」

奏：「あの戦いを見てなにひとつ取り乱していないあなたのほうがかなりできるほうだと思いますが？」

アビス：「当たり前だろ、なんせ私は魔界帝国一代目の魔王アビス・F・ルシフェルだからな。」

魔王立ち+ドヤ顔で自慢する。

奏：「えつ、魔王！？」

やはりそれを聞いて驚かない人間はいないらし。

悲愴：「た…助かつた…」

パタム

奏：「まあ、こんな風に襲われたら普通こうなりますからね…」

アビス：「全く、二代目の道はまだまだ遠いな。」

現在時刻は11時30分、まだ一日の半分もすぎてないのに衝撃の連続である…

はあ～運命は必然…とかいう言葉を今だけ信じてやろう。

第四話 運命は必然…とか言つたりじょ? (後書き)

SDガンダム ガシャポンウォーズが熱い!!
古くてすんません…

第五話 チョコボールで「本当にあるのか?」と思ひついに当たりない金のH

アスハム・ブルダードて誰だっけ?

第五話 チョコボールで「本物なのか?」と睨みついでいたりなこと金のHAN

悲愴：「……ん?」

景色がぼやけて見える、どうやら俺は寝ていたようだ…なんか嫌な意味で気絶した思い出があるが…まさか…

悲愴：「夢…今までの全部夢だったのか…」

奏：「あっ、起きたんですね兄さん。」

アビス：「全くあのくらいで気絶するとはな…田も向けられないぞ。」

悲愴：「…………」

どうやら夢ではなかつたようだ…

アビス：「お~い…あからさまにがっかりするのはやめてくれ。」

??:「チヨコ…モモチヨコモモチ…」

ん?なにか聞き覚えのない声が…見てみると…

悲愴：「あああああああああああああああああああああああああああ化け…」

アビス：「うるせえ…」

ちやぶ台を叩いて怒鳴るコスプレ少女。

悲愴：「がはつつ…」

おかしな叫び声をあげ即正座する俺。

奏：「兄さん…意味不明な叫び声になつてますよ…」

それは俺の心の中であつてから言わなくていいんだよ、自称俺の妹よ…

アビス：「こいつは魔王に忠実に従う悪魔のチョコボールモモチ…

略してチョコモモチだ。」

チョコモモチ：「チョコ…」

ちやぶ台の上におかしな生き物が立つていた。口で説明するのがめんどくさいので料理本風に説明しよう。みんな、紙とペンを持つんだ。

1、まず、逆」的なものを書いて…
やつぱこれもめんどいので俺が今描いてあげよう。
うん、これは…

アビス：「うわ…下手だな。」

悲愴：「仕方ないじやん。パソコンで一十五秒くらいで描いたやつ
なんだから」

奏：「兄さんリアルな話はやめてください…」

本当のことを書くのはそこまでにしておこう。

アビス：「このチヨコモドはお前をこのアパートまで運んでくれた
んだぞ…！…礼の一つくらこはないのか…！」

悲愴：「感謝します。監督…」

チヨコモド：「チヨコチヨツコ」

アビス：「お前たちはいつたいどこの高校の野球チームだよ？」

悲愴：「違うぞ自称魔王少女、高校の野球チームじゃなくて柏レイ
ソルなんだぞ…！」

チヨコモド：「チヨツチコ」

アビス：「次自称とか言った日には貴様の命はないぞ？」

悲愴：「あつ、意外と疑問形だ。」

奏：「どんな意味があつて言つているかが分からないのですが…」

悲愴：「ふん、まだまだ修行がたらんな自称俺の妹。」

奏：「スクラップになりたいんですか？」

悲愴：「じめんなさい…」

俺の土下座により俺は一人と一匹に敗北してしまった…といつかそ
のうちの一匹つて最初俺の味方だつたような気がするようなしない
ような…まあいいか。

悲愴：「それでじしょ…」

ギロー！ × 2

悲愴：「…じゃなくて魔王様、今は何時でござりますか」
ふう…危うくたつた五話で小説が最終回を迎えたになつた龜^{ゼイ}

アビス＆奏：「五時三十二分…！」

バシューン 僕はうまく逃げだした。

アビス：「逃げるな悲愴！－これから一人の紹介の詳細に入るところなんだぞ！－」

奏：「そうですよ兄さん！－泊つてください」

悲愴：「泊つてくださいじゃなくて止まつてくださいなんだけど！－」

！」

追いかける一人を無視して全力で走る。どうやら僕はまたもや不幸な目にあつているらしい、しかもこんなに大きな不幸が続いたのは初めてである。もしかするとこのまま僕は死んでしまうのかもしれない…仕方がない前々から考えていたあの作戦を実行する日がやつてきたようだ。

そして十分後

悲愴：「ふいーあの一人やつとあきらめたのか。」

毎日生徒に追われてきた僕をそう易々（やすやす）とつかまるられるわけがないのである。

悲愴：「んじゃ早速行つてみ…」

チョコモド：「チョッコー！」

悲愴：「んじやめなー！」

あのじしょ…じやなくて魔王様がつれてきたという変な生物チョコボールモドキ略してチョコモドが僕の肩に飛び移つてきたのだ。

悲愴：「驚いたな…まさか僕の速さについてこれるなんて…すごい

なお前。」

チョコモド：「チョッコココ！」

チョコモドは自分の胸を強くたたいた、おそらくえつへんと言つているのだろう。

悲愴：「んまあ、細かいことは気にしないでとりあえずついてくるのなら覚悟するんだな…僕が行くところは少々厄介だぞ。」

移動中

悲愴：「はあ…はあ…はあ…はあ…ぜい…ぜい…ぜい…」

1000段以上もあつたのではないかと思われる階段を上り僕はそ

の場に崩れ落ちていた。

チヨコモド：「チヨツコ、チヨツコ……」

悲愴：「くつ……俺の肩にはあ……ずっと乗つてはあ……るんだからはあ……苦労するのはあ……は俺だけだつた……」

少し考えれば分かることだつただけに妙に悔しい、人間生きていれば一度は体験することだと私は思う……

悲愴：「まあ……」

そう言つとやつとの思いで起き上がる目の前には大きな鳥居をしてさらに奥に大きな建物がそびえたつていた。そこには……

チヨコモド：「チヨコチ」

悲愴：「すまん……なんて言つてゐるか全然分からん。」

……神社である。

第五話 チョコボールで「本物であるのか?」と騒ぐハリコロ金のH

ん?あれ挿絵ついでにせめて貼り付けるんだ?

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8642y/>

GENTS THE WORLD

2011年12月21日19時48分発行